

イーナ・ハイン先生招聘イベントに参加して

渡邊 明

2023年2月2日と3日に開催された東京都立大学ドイツ語圏文化論教室主催のイベントに参加しました。2日はウィーン大学教授のイーナ・ハイン先生による、リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』という「越境文学」を扱ったワークショップが行われました。日頃ドイツ語という「外国語」で書かれた文学を日本語で、あるいは原文を訳読しながら読むことが多いなかで、日本語を母語としない作者が日本語という「外国語」で執筆した文学作品を読み、分析するというのは新鮮な経験でした。

今回のワークショップで扱ったのは物語の第二章と三章部分で、1960年代の日本において、主人公のベンが自身のアイデンティティに葛藤する様や、日本語を学ぼうとする彼を「外人」として遠ざける人々、そして彼らとは異なり一人の人間としてベンに接しながら日本語を教え、交流することになる安藤と出会う場面です。

この場面を中心に作品を読み、イーナ先生のお話を聞くなかで私が興味を惹かれたのは、「ことば」という主題です。私たちは母語であるところの日本語という「ことば」を日々およそ無意識に使っています。他者とのコミュニケーションに際してはもとより、文学を読む際や思考の際などにおいても、道具・手段として「ことば」は基本的に無批判に、意識されることなく使われています。母語としてある種「ぞんざい」に日本語を使っている私たちに対して、ベンは外国語の習得という点ではもちろん、「非日本人」である彼が日本語で対話しようとすることに人々が抵抗や拒絶を示すという文化的な部分での問題にも直面します。日本人が普段何気なく使っている母語と同じ「ことば」で彼が話そうとするとき、そこには単なる道具の相違とは別の問題が生じます。アイデンティティの苦悩と家族関係に由来する不安定な帰属意識を抱えながら、日本語という「ことば」を介して日本の文化圏に入っていこうと苦心するのです。そうした彼の姿に、私自身がこれまでドイツ語を学んでいるときに、果たして同じような態度で「ことば」に向き合っていたのかと省みることになりました。「ことば」の底に潜むものを無視し、自らの母語との間に単純な一対一の関係があるものとして他の言語としてのドイツ語を捉えてはいなかったかと考える機会になりました。

そのことに関して、今回のワークショップのなかでとりわけ興味深かったのは、『星条旗の聞こえない部屋』というタイトルに関する話題です。日本語でつけられたこのタイトルに対して、他の言語の翻訳ではどのようなタイトルになっているのか、例えば原題の直訳なのか、異なるタイトルなのか、手が加えられているのであればそれはどういったものか、などを比較検討しました。その上で自分がドイツ語訳版のタイトルをつけるとしたらどのようなものにするのか、という問いに対しても様々な意見を聞くことができました。私自身はこれまで他言語の作品に対して邦題をつける際には、余計な手をいれることなく原題をそのまま日本語訳すればいいと考えていましたが、議論をするなかで、「ことば」を単なる道具としてみるのではなく、その根底にあるものにも目を向けるのであれば、作品の原題をただ無批判に直訳すればいいというものではないことに気づかされました。

翌3日に行われたシンポジウムは「物語とジェンダー ― ドイツ文学研究と日本文学研究の交差」という表題のもとで、五人の登壇者からそれぞれの専門についての発表を聞くことが出来ました。各登壇者が扱う対象は全く異なるものであり、次から次へと登壇者ごとに新たな内容が展開されていき、あっという間に感じるほど濃密な発表でした。そしてそれぞれの発表は独立した別個のものでありながら、そのなかで互いに交わる部分、例えば家父長制、同性間の関係性、エイジズムやルッキズム、「犠牲者」をめぐる問題など他の登壇者が言及していたことが、別の登壇者の発表でも再び現れてくることがあり、副題にもあった「交差」という部分がまさに感じられるようなシンポジウムであったと思います。

こうした体験は学部生として文学研究に取り組む際にも参考になるものであったと考えます。卒論の執筆などに際して、対象とする作品をひたすら深掘りしようとして、直接関係するものだけを追い求めるあまり、ともすれば視野狭窄の状態に陥ることがあります。一点を深掘りしていくことももちろん大切ではありますが、鳥瞰的な視点を持って、一見無関係に見えるものの中から何か参考になることはないか、自身の研究対象へと還元できるようなことはないかと探ってみることも大切であるということを経験できました。

二日間にわたって参加できた今回のイベントは、文学に対して自分がどう向き合っていくのかを改めて考えることのできる素晴らしい機会になりました。